

外観2スパンのみを残した 東京中央郵便局庁舎は 登録有形文化財に値しない

シンポジウム「都市環境におけるモダニズム建築の保存・活用の意義」

「トキを焼き鳥に食うようなもの」。2009年2月、東京中央郵便局庁舎再開発事業の見直しを求めた鳩山邦夫元総務大臣の発言によって、一挙に同庁舎の保存問題がクローズアップされたが、計画は見直しされることはなかった。

4月28日、シンポジウム「都市環境におけるモダニズム建築の保存・活用の意義」がDOCOMOMO Japan主催(司会藤田義男/建築家)が東京都内で開かれ、内田祥哉(東京大学名誉教授)、藤岡洋保(東京工業大学教授)、長山雅一(流通科学大学名誉教授)、鈴木博之(東京大学名誉教授・青山学院大学教授)、兼松紘一郎(兼松設計)と建築界の大御所各氏が登壇した。

これまで幾度となく両郵便局庁舎に関するシンポジウムが開かれてきたが、今回のシンポジウムでは「東京・大阪中央郵便局再開発事業における文化財保護のあり方」を副題に置いているのは、東京中央郵便局庁舎を登録有形文化財に登録する動きに対する批判ならびに、東京中央郵便局より完成度の高いとされる大阪中央郵便局の解体阻止を呼びかけることが目的だ。

通信省出身の内田氏は「東京中央郵便局庁舎は日本的なモダニズム建築を徹底的に追求した建物として、国際的にも高い評価を得ている。通信省では吉田(鉄郎)さんは神様のような存在だった」と建築の可能性を追求した吉田氏との思い出にも触れた。

藤岡氏は、モダニズム建築の解体理由によくあげられる「老朽化」や「耐震性能不足」は、法律などの制度や技術のあり方など、現代社会の仕組みを見直すことにつながるとした。東京中央郵便局庁舎では、郵便窓口、事務、集配、厚生施設などの複合機能を処理するだけでなく、首都の玄関口にふさわしい記念性も求められた。内と外が対応しつつ、建築に必須の要素だけで長大な立面を冗長に見せないことを成し遂げた極めて完成度の高い建築



向かいに建つ東京駅駅舎復元工事が完成する今年5月、東京中央郵便局再開発工事も工事の囲いがはずれ、建物の全容をみせた (写真:兼松紘一郎)

だったが、その一部が残されただけで、立面と内部空間との緊密な関係は失われ、外壁タイルは取り替えられてしまった。既存部分はJPタワーの設計を制約する要素にしかならず、「残すことはつくること」という保存の理念に照らして疑問である。オーセンティシティ(当初のモノの重視)の観点からみても、文化財とは呼べないと思う、と主張した。

鈴木氏は40年前の東京駅周辺の航空写真を示すが、ほとんどの建物に解体を示す「×」印がつく。「これほど首都が変貌する国は異常。1916年築の東京銀行協会(東京・丸の内)など、いくつかの建築が保存されているが、その多くが高層ビルの低層部に一部外観の躯体を貼り付けたレプリカ保存であり、外国人建築家から失笑を買うほどだ。東京中央郵便局庁舎も同じこと。一部保存は、保存という名の欺瞞に過ぎない」。

兼松氏は、「申し訳程度の外壁躯体の保存を登録有形文化財と認めたら、大阪中央郵便局はじめ、歴史的建造物がそれにならって超高層化され、都市の記憶が失われる」と切り出し、沖縄にある3つのモダニズム建築(P41参照)を出しながら、「建築は誰のためにあるのか」を問いかけた。中でも、聖クララ教会(沖縄・与那原)では、コンサート活動を通じた建築文化を広めていることを挙げ、日常からの市民活動を提案した。

解体の危機が迫る大阪中央郵便局だが、「大阪中央郵便局を守る会」の代表を務める長山氏は、「今回のシンポジウムで勇気もらった。しかし、歴史的建造物の価値が社会に伝わらず、大きな市民運動に発展しないのは残念。中・高等学校に建築教育を入れてはどうか」と呼びかけた。

シンポジウムの企画者の一人、南一誠芝浦工業大学教授は、「文化庁が国会で国指定の重要文化財の価値があると回答した

東京中央郵便局は、鳩山邦夫総務大臣らの働きかけなどにより保存部分が倍増したとはいえ、そのほとんどが解体された。一連の経緯を考えたとき、登録文化財とすることが妥当なのだろうか。大阪中央郵便局は、事業計画は保留された状態だが、今まさに解体されようとしている。会場の皆様もこのことについて自分の考えを発信していただきたい」と満席の会場に訴えた。